

わが青春の軌跡

<183>



嶋津隆文

昭和22年の7月、愛知県渥美半島は、郷子の実の歌で知られる伊良湖岬（田原市）に生まれた。太平洋の潮騒を聞きつつ、その浜辺で季節を問わず遊びまわったものである。戦前、佐々木信綱がここで新春を迎えたいと訪れたことがあった。しかし岩山に登った歌人は眼下に広がる初日の出と大海原の壮大さに創作の作業も忘れ、言葉を失いつつまでも佇んでいたという。往時村長として彼を案内した祖父から聞いたこの話しを記せば、故郷の風光明媚さは分かってもらえるに違いない。

父は軍人で関東軍の将校であった。終戦後は地元に戻り組合に勤めていたが、酒豪で情にもろく、それだけに地域での調整役をよく乞われていた。母は長く日赤の看護婦をしていた。だが気性は激し

く、自己を抑えて他人に迎合するタイプではなかった。ある時周囲の目を意識しがちな小学生の私にこんな言葉を口にしたものである。「あなたの八方美人さはダメです。まず7人の敵を作りなさい。そうすれば7人の味方ができるのです」。そんな両極端の両親の下で、いずれの生き方も未消化のままに育ってしまった。それが今日の中途半端な自分の性格が形づくられた所以ではないかと苦笑する次第だ。

ところでわが青春の軌跡である。もし青春が新しい世界に触れ、貴重な出会いに心を沸き立たせる季節をいうとしたら、自分には3度の青春があったといえよう。1度目は誰もがそうである大学時代の思い出であり、2度目はNIRAというシンクタンクでの生活であり、3度

目は「旅」という舞台でののもろもろの出来事がそうである。

1 大学という 苦い時代

1度目の青春はしかし、苦い思い出ばかりである。新しい世界であったはずの大学受験も大学生活もおよそ爽快さとは縁遠いものであった。

大学はひたすら京大に入りたかった。東西文明をつなぐという壮大なドラマの舞台として西域、シルクロードに心躍らせていたのである。その分野での研究は京大と相場が決まっていた。しかも当時京大の若い助教授が西夏文字の解説に成功したとの記事が出、身体が震えた。もう京都以外まったく目に入らなくなっていた。しかし不合格。浪人生活は東京に出て、駿台予備校に通った。翌年京大に再挑戦する。しかしまたまた不合格。さすがに落ち込んだ。

仕方なく入った早大には須らく馴染むことができなかった。講義は殆ど出ず、映研、新聞研、社研、ESSなど無差別に顔を出しては次々に辞めていった。どこへ行っても熱が入らないのである。麻雀さえ長続きしなかった。多くの学生がそうであったように司法試験に挑戦すべく法律のサークルにも行ったが、これも簡単に脱落することとなる。そのうちこの大学も雲行きが怪しくなり、早稲田



5歳の頃に母と（昭和27年）

も学園紛争の波が押し寄せてきた。思想性など持たない中で、しかし無為に時間を過ごしていた生活に耐えられなかったのだろう、身体だけがこの波に乗って動き始めたのだ。集会に出かけ、議論の場に入る。だがやがてその状況にも違和感をもち、空回りし始めることとなる。西田幾多郎もヘーゲルもローザルクセンブルグも理解できないのである。「青春が美しいなどは決していわせない」。当時流行ったポールニザンのこの甘酸っぱい一節さえ口にするのが憚られる日々であった。留年もした。救いといえれば南こうせつの「神田川」のメロディであり、しかしその歌詞のようにロマンティックに別れず、なし崩し的に一緒に暮らすようになる妻との幾つかの小さな思い出であろうか。

田中首相が列島改造論とともに登場し、連合赤軍が16人の仲間をリンチで殺めた年、都庁に就職した。大学生活を離れることにつくづくホッとしたものである。

そんな沈んだ大学での青春の季節を、わくわくするような復活戦として展開してくれたのが、30歳代なかばに身を置いたNIRA（総合研究開発機構）での3年間で

あった。当時新宿三井ビルにあったこのシンクタンクは、おりしもバブル経済の真っ盛りと重なって、カネとヒトと時間に頼る恵まれていた。NIRAの名で、どこかどんな著名な学者や経営者であろうが直接に話を聞くことが出来た。何よりも下河辺淳という国士計画のクリスマ理事長を軸に各省庁のキャリアや大企業からの出向者数十人で構成されたこの機関は、50年のタイムで国家を語り100年の広がり世界を論じあうなど出来た。下河辺理事長の時空を越えた発想や国家への壮大な示唆、時に加えられる諧謔的な文明批評に胸が躍った。あるいは梅村忠夫民博館長の教示に啓発され、矢野龍平大教授の激しさにも直に触れた。ここは大学受験で憧れた京大の研究機関そのものではないかと納

得したものである。その中で自分は「人生80年時代の社会システム」を議論し、あるいは「米国からみた日本の住宅政策」「京都・大阪・江戸東京の三都のあり方」などを研究テーマとした。

しかも幸運であったことに、ここでの研究成果はその後の自分の生活を大きく変えていく。例えばNIRAを離れて1年目、国連の国際居住年にあたって朝日新聞が主催した懸賞論文に応募し1席となる。賞金と米国旅行を得るばかりか、その論文を軸に単行本の出版話しがTBSブリタニカから持ち込まれた。そこで出版されたのが自分の処女作「どこで、どう暮らすか日本人」である。これは売れた。それだけではない。多くの人々が接触してきたのである。竹村健一がラジオと週刊誌で対談したいと申し込んできた。田原総一朗が、朝まで生テレビへの出演を持ちかけてきた。自分の著作が全国ベースで話題になることは率直に心優しいものであった。

同時期、もうひとつの嬉しい話が都庁の上司からも持ちかけられた。体調を崩

育成と都市問題への提言を意図したこの試みに感動し、早速に都庁や建設省から数人のメンバーを募った。そしてかれこれ10年近く私塾ゼミといった形での政策研究と執筆発表のチャンスを得ることになったのである。「地方自治研究所」の発足である。これも遅れてきた貴重なもうひとつの私の青春と云ってよかつた。ちなみにこうしたNPO的な研究組織の形態は、団塊世代などこれからの長い高齢社会を生きる人々の、社会貢献のためのひとつのサンプルではないかと思うが如何であろうか。

3 「旅」というもうひとつの青春

さて、3度目の青春の場として、もうひとつ「旅」というステージを挙げることにしたい。本誌のこのコーナーの趣旨と違わず、といった疑問が出されそうである。しかし新しい世界に触れ、貴重な出会いに心沸き立つといえは、自分の場合、それは「旅」なのである。すなわち自分にとって「旅」は青春そのものといつてよいものなのだ。

「旅」は昔から好きである。海外に限らない。国内もくまなく回った。ふるさと

伊良湖岬に流れ来た椰子の実を取り上げた柳田民俗学的な関心からか、受験時に抱いたシルクロードへのロマンのせいからか、少年の頃から見知らぬ土地への興味はとどまることを知らない。全国や世界を回るNIRAへの出向やNY市の駐在員になったことは「旅」の機会づくりに幸いした。加えて姉妹都市交流を進める国際部に配属となったことも重宝であった。もっとも個人で行った「旅」の対象地も

かなり多様であったと思う。

若い頃は確かにメジャーな欧米諸都市を巡ったものだ。だが40歳頃になるといつのまにかいわゆる辺境といわれる地を訪れることを喜びとするようになった。より大きな感動と想像力を味わいたいと思いはじめたからである。アンデスのマチユビチュでは宇宙人がこの空中都市をつくったに違いないと確信し、イスラエルのガリラヤ湖ではイエスが民のために魚を満たした伝説は真実であると納得した。ガンジスでは異臭を放つ流れも間違いなく清潔であると了解し、憧れ続けたサマルカンドでは満月に照らされた遺跡の中にチムールの声を耳にしたと信じた。

その「旅」も50代近くになると更に変わってきた。加齢とともに死への「旅」に関心が移ったと言えるかも知れない。人の死と民族の死とを意識し、死後というもうひとつの世界を具象化する地に足を運び始めたのである。ローマの地下にカタコンベを訪れキリスト殉教者の骸骨に触れ、下北半島は恐山に死霊の声を捜し求めた。さらには、満州の荒涼とした大地やシベリアのツンドラの凍土に埋もれた日本兵の形跡を追い、カンボジアではポルポト政権で撲殺された白骨の山を慰霊した。そういえば墓地めぐりはかれこれ20年近くになるだろうか。

新しい世界に触れ、貴重な出会いに心動かせる「旅」は冥土に向かっているとまはることはないようだ。しかし、かように私の青春は、形を変え姿を変え拡大していきつつある。

（東京観光財団専務理事・前取用委員会事務局長）



サマルカンドの遺跡で（昭和58年）

し早期に退職することとなった。下河原忠夫理事から、私財を提供するから共に地方自治の研究組織をつくろうではないかというものであった。年間100万円と事務所が提供された。若手の